

村野次郎創刊

香蘭

二〇一九年(令和元年)十一月一日発行(毎月一回二日発行)

香蘭

第九十六卷第十一号

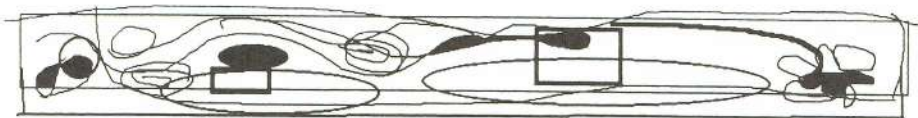


2019年(令和元年)11月号

第 96 卷

第 11 号

通卷 1067 号



香 蘭

2019年(令和元年)11月号
第96巻 第11号 通巻1067号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (51)	内藤 美也子	表二
作品一特選	西野・坪倉・伊藤(康)・鈴木(桂)・本田・ 内藤・飯島・大井田・鈴木(順)	2
作品二、三特選 (九月号)	江口・白井・中村(か)・岩田・青山(侑)・後藤・ 沙阿羅・小林(純)・桑山・竹田・山本(武)	4
作 品		6
一		22
二		30
三		37
推薦香蘭集		38
香 蘭 集		19
歌の生まれる場所 (82)	寺澤 郁子	20
村野次郎への旅 (116)	千々和 久幸	43
七 首 抄 (九月号)	菅沼 加瀬・楯・保本	44
エッセイ・自由研究	藤田 祐恵	46
魚 点 (九月号) 下旬の重さ	渡 辺 礼比子	48
作品一特選欄評 (九月号)	千々和 久幸	50
作 品 評 (九月号) 作品一	朝 香 ふさ枝	52
作品二	中 井 房 江	54
作品三	宮 口 弘 美	56
香蘭集	桜 井 京 子	58
緑 地 帯	中村(か)・河野・奥田(寛)	61
他誌拜見 108	坪 井 京 子	62
明宝研究会第一〇回八月例会	桜 井 京 子	70
文法あれこれ (6)	田 端 明	72
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		74
令和2年新年歌会のご案内、申込書、詠草記入用紙		77
歌会及び会合・会員消息・他		80
編集後記・新宿日記		表三
表紙絵	中村 陽子「鏡を置けば」	和雄
	目次・緑地帯カット	和雄

内 藤 美也子

夜おそくひとり帰りて厨べの冷たき

水をのみてねにけり

『夕あかり』

これは大正十三年、村野先生三十歳の作品。今の時代の歌としても充分通る歌である。「冷たき水」が村野先生らしく、すがすがしくて清潔である。

この当時、奥様（輝子夫人）は病んでおられ、帰宅後の食事の用意なども、ままならない状況にあったのであろう。

お酒が飲めない先生は、遅く帰って来ても水を飲んだのであろう。先生には、「はなやかに宴会終り酒のめぬわれのみ腹をすかして帰る」の作品もある（『村野次郎歌集』111頁、『村野次郎三百首』87頁）。

また、水は命をつなぐものである。今年の炎暑も「こまめに水を！」と何度言われたか。お金に困ることはなかった先生だろうが、「冷たき水」に何故か清貧という言葉を思う。

何事も平易平明、シンプルなのが一番良くて美しい。

（『夕あかり』99頁、『村野次郎三百首』11頁）

四 選 者 の 作 品

信号の下で 平塚 千々和 久幸

信号は待つためにあるそれゆえにゴドーも歯科医も弁明はせず
信号があるから渡るといふほかにさして意味なき顔して渡る
今はただ退屈している者だけが止むなく信号渡つて行けり

信号待ちしている観光バスの窓見知らぬ人がわれに手を振る
信号があるから鬼も人間も渡ると理屈を言われてもねえ

『雪国』にも信号ありて白い夜の底「信号所に汽車が止まつた」

「やがて死ぬけしきは見えす」足早に誰もが朝の信号渡る

信号がある朝ひとりでに歩き出す人間なんか見ちゃおれないと

益会益えの街 鎌倉 香山 静子

大伴旅人が今日の話題なり令和元年の春とづくに過ぎぬ

万葉集の売れ行きとみによきと言ふ本屋の主は顔ほころばせ

貸衣装の同じやうなる花柄の浴衣の乙女ら参道をゆく

タビオカのカップ持つ少女ら町角に列をなしゐる猛暑の午後を

日盛りの町へ仏花を買ひにゆく益会の支度をやうやくすませ

枝豆を茹でる匂ひの流れ来る少し離れたわれの部屋まで

犬猫も人もぐつたりの猛暑日を蟬は鳴きつく歓喜の声に
湿気なく蟬も鳴かざる北国の夏を思へり静かなる夏を

とおいのもの 我孫子 丸山 三枝子

〈栄光の爬虫類〉とぞ先ず讀みて鳥の博物館展示室に入る

栄光のつばさひろげて剥製の風切羽は風を忘れて

齋藤史の詠みにしヤンバルクイナなりこんな所で餌を啄める

水に浮き踊る河童の四体の影が水の面にわらいはじめた

治療終え戻りし河童とこちら向く一体を指し言う房子さん

足のばし来し手賀沼で草生ゆく白鳥家族に会えてよかつた

さざめきて友どちと行く沼の径コブハクチョウと河童のはなし

とおいのもの 鯛のこえ風の音 夏空をゆく白雲の果て

さびしい葦 東京 桜井 京子

水の面はまもなく雨になるだらうすういとアメンボ通りゆきたり

梅ゼリー無言で食べて皿の上に大きなたねがひとつ残りぬ

何もせずなにも思はず 夏の日の青桐の葉が裏がへりをり

この夏はペランダに蟻が来なくなり朝鮮あさがほ咲き溢れたり

蟻螂は土手道に出て鎌をふり「反日」なぞと言ふにあらずや

ニッポン憎し韓国嫌ひ しかすがに旧盆こよひはまだかなる月

考へる葦はさびしいかんがへて不買運動するのだらうか

登つたら登つた先にまた坂が続いてをりぬどこまでも坂

作品一特選



(五選者共選)

飛 翔 体 東 京 西 野 美智代

アラートを鳴らし不安を煽りしに選挙の後は飛翔体と呼ぶ
飛翔体と言へばUFO浮かぶとふ若者きみらほんとにヤバイぞ
連休に埋もれさせても忘るまじ五月三日は憲法記念日

入院が三月を越えし子の口が持て余してあるサーロイン・ステーキ
そうめんと高野豆腐がうまかつた 一時帰宅の舌が言ひたり
バイク事故に折れたる膝が全荷重かけて立つまで要しし百日
病棟のこぢんまりした売店の前に置かるる温泉饅頭

荒川がゆく ふじみ野 坪倉 寛

河口まで四十余軒で海拔は五メートルなる荒川がゆく
補聴器をはずせば隠遁せしここと情報減れども雑音あらず
この人の親父はきつと鉄ちゃんだ利仁悪なる名のアンカー見つつ

日は高くあれども既に午後六時ウィンブルドンに雌雄いまだし
8ゲームオールでこちらは午前二時もはや私はギブアップです
世の中にビールほど不味いものはないこんな男があてもいいだろ
壊れたる物もときには直るから有象無象のがらくた溜まる

古 漬 け 東 京 伊 藤 康 子

鼻緒もげ雪道を裸足で帰りしと母くり返す疎開の暮し
利根川へ洗濯に行けば幾体もの死体流れて来たりと語る
配給の列に連なりさつま芋の切り干し一袋やつと確保すと
また同じ話と流さず心して母の戦争体験を聞く

播り粉木のごとく太りし胡瓜から放置したるを責められており
古漬けの酸っぱいしょっぱい後梅を壺から出してたまに味わう
梅干しの二個入り特大おにぎりを持って急いで出勤したり

月 上 弦 に 西 宮 鈴 木 桂 子

仕事終へ月上弦に低く浮く夜を帰りゆく待つ子のあれば
平凡に生きよとも言へずしろつばいオムレツのやうな月振り仰ぐ
アルバイトの裕森ゆきもりくんはいつ見ても疲れたやうにレジに立つてる
子のもらす「さうかやつぱり遺伝子か」ディープリンバクト逝くテレビを見つつ
暑き日を重ね重ねてひぐらしの鳴くを聞かざるままに夏逝く
雨すざし夜の路上にひそかなる秋の香をかく深々と暗
われにまだ働く力の残れるを明日なきなどと何か嘆かむ

フクロウの 長崎 本田 民子

フクロウの夜ごと鳴いてた故郷の森は老人施設となりぬ
 わが耳の蟬か木の間に鳴くセミか判別しがたいほどの暑さよ
 原爆忌平和宣言する市長に後へ引くなどトンボ飛び交ふ
 玄関に昨日カマキリ今日沢蟹にばつたり出会つてほんに暑いね
 半月がふうわり浮かぶ昼の空おもちやのような飛行機がゆく
 プランターの撫子の花に抱かれてクマゼミひとつ息絶えている
 花おくら両手いっぱい持ちくれし友思うなり 初盆近し

複合汚染 鎌倉 内藤 美也子

意外にも狭い土俵 これならば一突きすれば勝負がつきさう
 黄の色のオウゴンマサキ明るくて江戸東京博物館をぐるりと囲む
 地震後の復興図に職人が鯨のやからと酒盛りしてゐる
 さうすぐには死なないけれどなんとなく不気味であるぞ複合汚染

花びらはどれもすこうし呆けてゐて笑ひこゑして夕路地に落つ
 春の塵モップに拭ふ わが犬が右にひだりに銜へてあそぶ
 詩に瘦するといふこともなき春の夜のおほろのしやぶしやぶサラダ

軋轢つづく 川崎 飯島 智恵子

金柑の白き小花を散らしつつあさぎまだらが葉づたいにいづく
 脇腹にイルカがしがきをあげているスイミング・スタールの送迎バスは
 チャンネルを何処に変えても日韓の軋轢報ずただならぬ暑さ

四面楚歌 漁夫の利なども口にのせ話術たくみな御意見番は
 いっぱしの批評家おればやおら夫が「少し黙っていてくれないか」
 旨寝からはっと目覚めぬ「家族葬ですませました」は私のことか
 引き籠つたらそれにて終りと自らを奮いたたせてくたくたになる

インターホン 川崎 大井田 啓子

インターホンはわれの埒外コードレスにこだはる夫がカタログ広く
 無線式のインターホんにこだはりて二年間がむなしく過ぎぬ
 無線では電波がとどくか微妙です電気店に幾度言はれし
 初蟬が短く鳴きぬインターホンの子機が机上に訪ふ人を待つ
 インターホンがよく聞こえろと言はれをり宅配便を差し出す人に
 インターホンにわが応答を待つ人は肩に蝶など止まらせぬむか
 ゆつくりと紅芙蓉が閉ちてゆくかすかな秋の気配の中に

光の雫 札幌 鈴木 順子

空に咲く光の雫受け止めし海は動かさず闇は深まる
 わが裡の無数の小部屋に仕舞い込むあんな事とかこんな事とか
 底なしの沼に沈める石のように誰にも知られずいられたらいい
 蜘蛛の巣のように覆いて物憂げに私の今日が絡め取られる
 紗のように朝もや垂れて音もなく緑掠れて立ち尽くす木々
 細く開けた窓には光る帯のように青い格子の一本の空
 デバ地下の特等席に陣取りて友待つ合間たまに試食す

作品二、三特選



(九月号作品から)

桜井京子 選

〈作品二〉

麗しの大和

柏江口絹代

明日生きる樂しみのひとつ庭先に植えたる茄子の花開くこと
麗しの大和の国のすめらぎの御代が変わりぬ 雨降り止まぬ
身の内に螢のごとき灯を点す人でありたい 子を殺めるな
動けない脳性麻痺のかつちゃんがロボットになり夢に出て来る
どくだみの花ほつつりと光りおり母のいる家水無月に入る
暑き日にサイレン鳴らぬ消防車が蕎麦屋の前で止まるを見たり
・そこにある物をしっかりと見据え、特に二首目のアイロニーは出色。

野茨の自由

長野 白井 紀代子

ほほえみを手渡すような彩雲に孫三人がスマホを向ける
田の水は羊水のごと温みつつふかぶか苗を抱きておりぬ
農薬などへつちらだよと早苗田をおたまじやくしが元気に泳ぐ
春開けてしどろもどろになりながら綿毛を風に託すタンポポ

葉桜の無数のひかり身にまとい今日は素直になれる気がする
括られず剪定されず手折られず道端に咲く野茨の自由

・草花や小さな生き物など対象にそそぐ温かな眼差しがよい。

七十五億

福岡 中村 かよ子

刻々とパソコン画面に増えてゆく世界人口七十五億
静けさに耐えられず押すりモコンを持った旅人七十五億
戦争は例え「おはじき」トランプ氏のテーブルの上に弾かる時
顔見ればゴルフコンペの成績が貼り付いている夫が「まず飯」
マイカーとカードと自由でどこまでも行ける気がした我が世代

・不確かな時代の不安感を凝視し、アイロニカルな着眼が湧える。

白き紫陽花

安来 岩田 明美

八十歳の夫を祝ひて炊く飯のゑんどう豆の瑞瑞として
おほどかに揚羽の蝶を休ませて白き紫陽花の辺り明るし
ストロベリームーンとぞ聞く六月の赤き満月天空にあり
梅雨を呼ぶ雷しばし鳴り響き猫の下げたる尻尾は孤独
持ち主の名を記したる太き杖医院の門に主を待てり

・何事にもあくせくしない心持ちが歌の世界を豊かにしている。

初夏

米子 青山 侑市

己が身を湯船に浸し慈しむ無為なる時に眼を閉じて
白き粉を畑一面に撒き散らし石灰食ひの落花生蔭く
松江なるホーランエンヤは船神事十年先は九十二歳

思い出すエンタツ・アチャコの「早慶戦」その決戦を正眼にしつつ
 これはこれは赤字補填の一策か「銚子電鉄ぬれ煎餅」は
 ・これまでさまざまなものを見聞して来た人生の滋味が滲む。

貧乏 蔓

小田原 後藤 彌生

国技館屋根の擬宝珠の見える部屋しかと聴くなり歌評の声を
 つつがなく大会果てて北斎が炬燵で絵筆動かすを観る
 ビンボウヅル大東京にも蔓伸ばし這ふを見るとさ少し安らぐ
 梅雨空に心曇る日思ひたち廿夏五個をママレードにする
 葉脈と茎のみ残して喰ひ終はりプロッコーより青虫失せる
 ・一首目から三首目、全国大会の記憶を印象深く残した。

六月の愚痴

相模原 沙 阿 羅

鎌倉は父と祖父母の眠る所 行きたい行きたい体は重い
 もう何年飲んでいのかこの薬 治ることなど無いというのに
 怠いのも浮腫んでいるのも副作用飲んでも震えは軽くなるだけ
 日常の買い物でさえ苦労する手足の震え薬で抑え
 自治会の集金回ればそれぞれの家庭の片隅見えてしまいで

・難しい病氣と闘いながら、それでもしっかりと生きています。

〈作品三〉

小さき死

横浜 小林 純子

熟寝とは小さき死に似て白昼のベンチに隠す死者の横顔
 きやらきやらと笑ふさうだよ葉桜はひこばえ繁る幹を搦る

梅一枝そののみ纏う若妻となりて弾きたし三味の太棹
 認知症の母の昂り鎮めしは黄なるアヒル 菖蒲湯に浮く
 ・どこから何が出て来るか分からない自在さが魅力 四首目は説得力がある。

今ここに

長崎 桑山 君子

今ここに居ることのみが確かにて昨日のことなど忘れておりぬ
 限界かなと感じるようなひと日をば重ねかさねて今日も生きおり
 短歌ことばかけらも浮かばぬ八十路われ庭に出でたり空眺めたり
 梅雨前の掃除をこまこま気遣いし人が今年は空より見てる
 ・短歌を支えに懸命に生きている作者である。尊いことだ。

我が家

大分 竹田 美智子

二年間留守にしていた我が家にも風がとおりて人が出入りする
 味噌汁やココアを胃ろうにいれてくれるたまには冷たいビールもほしい
 リビングが病室となり我だけの手厚い看護の贅沢を受く
 迷い鳥やつと我が家が家に帰れたね雨音がする土の香もする
 ・二年ぶりに自宅に戻った心弾みを歌う。二首目のユーモアが嬉しい。

ねじり花

福岡 山本 武子

公園の片方に飛んでゆく風を待ちタンポポの絮ゆれており
 眞白のセーラー服に衣がえ夏が来ますと乙女等がゆく
 ペランダにねじり花咲くその辺り空気が違う心地して見る
 来年も又逢いたいネとねじり花終りし花を丁寧切る
 ・移りゆく季節の中で出逢ったものを鮮やかに拘っている。

村野次郎への旅 (116)

「ザムボア」と次郎 (九)

千々和久幸

前回に続き「ザムボア」(朱樂) 第四卷第一號(復活號)に掲載された、白秋のエッセイ「朱樂から朱樂へ」を読もう。

…六年の春、深く感ずる處があつて、紫烟草舎を解散するとともに、全同人及び舎友を解放し、單に一個人と爲り、新たに右の諸君たちが曼陀羅舎を組織すると共に顧問として外部から指導する事となつたのであるが、同舎から「曼陀羅」を出したのは色々の事情から九月になつた。その創刊號に私自身草舎解散の辭を書いて、一旦師弟の關係を斷ち、藝術上の同朋として今後は終始す可く宣言した。

(中略)

…又、思へば一旦滅びた「朱樂」は再び實り、一旦閉ざされた紫烟草舎にも再び諸君に依て新しい烟があがるやうになつた。それ

と共に一方衰れた名のあの度しやかな巡禮詩社は再び詩の同人に依て繼承され、「詩編」が愈今の混乱した詩壇を救ふ可く出現した事は何という眞實と勇氣との爆發だ。茲に於て巡禮詩社も紫烟草舎も愈新しい繼承者を得た。

詩と歌と何れも今後の日本の新しい光となり、血となり、凡てが我等に依て統一される黄金時代が今に來る。かく云えばあまりの傲慢だと他流は笑ふかも知れぬ。然し一の藝術を立て一宗を宣傳するものがこれ位の自信が無くてはどうする。私はかかる時釋迦であり、日蓮であり親鸞である。

おお、凡てに喜びあれ。(大正七年一月)

この時期、雑誌の発刊、廃刊、併合をめぐつて白秋の身辺はまこと目まぐるしく動く。念のため整理しておくところなる。

「朱樂」(明治41、1908・11、大正2、

1913・5、19冊)、「地上巡禮」(大正3・1914・9、大正4、1915・3、6冊)、「アルス」(大正4、1915・5、10)、「烟草の花」(大正5、1916・11、12、2冊)、「曼陀羅」(大正6、1917・9)、「ザムボア」(朱樂)「復活號、大正7、1918・1)」、と同誌の論述はここまでである。

白秋が興し白秋によつて閉ざされようとした詩歌の舞台は、おのれが一步退くことによつて再び甦つた。自らをして己は釈迦であり、日蓮であり親鸞である。とまで言わしめた昂揚感が、読み進むにつれて次第に頂点にせり上がつてゆく氣息の見える文章である。

白秋はこの文章を書きながら己の中に再び点火された文学の焰が燃え盛っていく感激に酔い、悦びに包まれた身を歌い上げずにはすまなかつた。

ついでに本誌の名義人となつた妻草子の挨拶文の一部を引く。

大正七年の新しい年と共に、舊曼陀羅舎が紫烟草舎となり、雑誌の名もあの香高き朱樂と變る事になりました。(中略)

もと紫烟草舎は夫自身の詩舎の名であり、

さうして草舎に集まつた人達は、夫を單に詩歌の師としてではなくむしろ、其背後にある人間者に引きつけられて、しつくりと手を握り合つた、水魚も只ならぬ實に麗しい集團でありましたが昨年九月夫は紫烟草舎を解散致しました。それは深い夫の謙讓心からと、一つは同人の自由を尊重し、かつ大きく光らせる爲めにわざと顧問となつて、次ぎに生まれた曼陀羅舎の爲めに聲援しつゝ、今日に及びました。それで夫と同人の間は師でなく、子弟でないと云ふ事になつてゐましたが一層精神的には眞の師弟として、愛の密度が濃くなり愈不言不語の中に其禮節の美しさを見るやうになりました。(後略)

このような文章に接すると、白秋という人間像が不可思議な光を放つて屹立していることが解る。白秋はもはや單に詩歌の先達ではなく、自らが信仰の対象であり、周辺の子弟もそのことを求めていた節が見える。

今日とは時代が違うとは言え、また詩歌の立脚点が違ふとは言え、先に見た加藤克巳の白秋像とはかなりの落差が窺える。

白秋の自己愛の強さ、詩歌と人間への強烈

な愛と熱情、割り切りの早さ変わり身の早さが集團のリーダーとしての美質である間は大きな牽引力になろうが、一つ間違えば即綻びに繋がる危うさも抱えている、と見るのは穿ち過ぎであるうか。

思わぬ贅言を弄してしまつたが、先を急ごう。村野先生の作品は「月蝕の夜」八首の他に、河野慎吾と連名のエッセイ「朱樂復活に際して」が掲載されている。

月蝕の夜

村野 次郎

- 1 月蝕の光は暗しさうさうと鳴る笹藪にひと入る見ゆ
- 2 戸山學校の土手の笹葉に風出でて劍術の聲のをりをり聞ゆ
- 3 塵埃坂は夕風さむし路ばたの小石いくつかがけ落しあつ
- 4 日の暮れて牛たどたとと歩み來る足下青き野菜の光
- 5 竹藪のかなたに牛を追へる聲今は聞きつつ寒さを感じ
- 6 海のかぜ深く吹き入る雨の森地に歩むは白鷺ならし

7 力学の書讀み疲れ眠る人見つつさびしくなりにけり吾は(圖書館にて)

8 足冷えていまだ寝らえず霜の夜にほとほとうすきひげ撫でて居り

この歌は村野先生の24歳の折のもの。まだ早稲田大学商學部の学生であつた。麻布の巡禮詩社にはじめて北原白秋を訪ねて(大正3年)から四年目の作品である。

どの一首も手堅く、また丁寧に詠まれているという印象である。白秋の絢爛たる才華からすれば地味な感じがするが、実は師の白秋作品の多くは、華やかさよりも対象を正確に捉えた地味なものである。

2番目の作品の「戸山學校」は、1873(明治6)年6月に設置された陸軍兵學寮戸山出張所が、翌1874年2月に陸軍戸山學校と改称されたもの。所在地は現在の新宿区戸山にあつた。

同校は、日本陸軍の軍學校(実施校)の一つで、歩兵戦技(射撃、銃劍術、劍術など)歩兵部隊の戦術、体育、軍樂の教官・生徒育成と研究を行い、また陸軍を代表する軍樂隊として陸軍戸山學校軍樂隊を有していた。